

一爲始左傳七書以下、何も於大國聖仁刷事おしらし置也、京與關東だにも替候、況於粟散邊地之境、無器用之輩、以大國之比量仕合之事、爲一事不可有之候歟、○中

一先段如書載、廿々年之間城攻軍、當旗本卅餘度、雖成大利、定正一度不拔、太刀非發、大弩、只功者共、行相問尋事、不恥、以其上分別而成之、勝利以後及意見者、不撰貴賤、時々刻々褒美す、此故後日にも嗜いはんと、老若共に持歟、雖不珍軍計、存亡分筋目能々可思案事、貴踐上下によるべからず、當方勇兵等、以大功成事も、定正一身之譽と聞カ、されば朝々暮々不嫌老若祇候之者共、或及禮、或懸情之詞、累年過來候、○中

一先段如書載有油斷者、少も不可叶候、豆州越州兩國之中、不思儀廻行、其内調上州武州相州三ヶ國靜謐候者、他國へ打越、抛身於溝壑、可曝骸路頭事、不可痛片時も、一二ヶ州無爲之刻、成安堵之思、自隣州可被成懸計儀之段、末代之恥辱與被思、可擊他國爲山野住所、甲冑成枕、一夜陣にも、自身結繩取、歟、夜中甲おぬがず、終夜馬背明夜、如此朝良、至于被勢者、何之あやまちかあらん、申遣候子細者、如存如連々病者也、就中去今兩年、殊之外節々心地相煩、命可期、明日心中無之候間、返重説耳、他見之嘲恥入計候、謹言、

延徳元年三月二日

定正

曾我豊後守殿

〔甲陽軍鑑十二品第三十九〕信玄田武分別の事は、總別五年已來より此煩大事と思ひ、判をすへをく紙八百枚にあまり可有之と被仰、御長櫃より取出させ、各へ渡し給ひて、仰らる、は諸方より使札くれ候ば、返札を此紙にかき、信玄は煩なれ共、未存生とき、たらば、他國より當家の國々へ手をかくる者有まじく候、某の國取べきとは、夢にも不存、信玄に國とられぬ用心ばかりと、何も仕候へば、三年の間我死たるをかくして、國をえづめ候へ、○中又それがしとぶらひは無用にして、諷